

第102回日本精神神経学会総会

シンポジウム

OCD 関連障害に対する SSRI の効果——抗こだわり効果——

渡辺 義文 (山口大学医学部高次神経科学神経精神医学講座)

Hollander によって提唱された OCD 関連障害 (OCD スペクトラム障害) は、強迫性障害を中核として強迫性と衝動性を両極に位置づけた同一軸上の表現型としてとらえられる疾患群を指す。その中には身体醜形障害、心気症、病的賭博、自閉症など多くの疾患が含まれるが、SSRI の有効性が報告されており、セロトニン神経機能不全がその共通する病態として想定されている。しかし、いちがいにセロトニン神経機能不全といっても、脳内責任部位の違いや他の神経系の障害との関連から、疾患ごとの SSRI の有効性に差が認められるのは当然と思われる。

強迫性を「こだわり」「とらわれ」という観点からとらえ、例えば病的賭博は賭博への、身体醜形障害は外見への、心気症は身体疾患への「こだわり」と考えることができる。この「こだわり」に対する SSRI の有効性について、OCD 関連障害に属する疾患を対象に比較検討を加え、さらに

検討の幅を広げる意味で、これまで注目されてこなかった身体化障害 (身体へのこだわり)、気分変動症 (神経症性うつ病) (物事へのこだわり) に対する SSRI の有効性を提示する。

身体化障害に対する SSRI の効果は、少量の服用で1週間程度とごく短期間のうちに認められ、身体症状に対する執拗なこだわりが消失し、極めてあっさりした構えに変化した後、身体愁訴自体も消失する。神経症性うつ病に対する SSRI の効果も、少量の服用、短期間、と大うつ病の場合とは好対照の発現様式をとる。SSRI の服用で、短期間のうちに、うじうじこだわる構えが軽快し、「さっぱり、すっきり」と表現できる気分の変化が現れる。このような SSRI の効果発現様式は大うつ病のみならず、強迫性障害とも大きく異なっている。

(この論文は、抄録集より転載しました。)